

氏名	榮 浩行
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博甲第5858号
学位授与の日付	平成30年12月27日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)

学位論文題目	The characteristics and outcomes of small bowel adenocarcinoma: a multicenter retrospective observational study (原発性小腸癌の臨床的特徴と予後に関する多施設共同観察研究)
--------	--

論文審査委員	教授 吉野 正	教授 柳井広之	准教授 白川靖博
--------	---------	---------	----------

### 学位論文内容の要旨

原発性小腸癌は、全消化管腫瘍の1~2%と稀な疾患で、多くは進行期に発見され予後不良で、その臨床的特徴はいまだ十分に明らかでない。我々は、原発性小腸癌の臨床的特徴を明らかにする事を目的として、2002年6月から2013年8月の間に、当院及び関連施設(計11施設)で原発性小腸癌と診断された205例を対象として、その臨床的特徴、治療成績について後方視的に検討した。

検討の結果、空回腸癌の多くが症状出現後に進行期で発見されていた一方で、十二指腸癌はスクリーニング目的の上部消化管内視鏡(EGD)で発見されることが少なくなかった。また、全生存期間に対する独立した予後不良因子として、PS不良、CEA高値、LDH高値、Alb低値、診断時症状、Stage III-IVが抽出された。Stage IV患者54例のうち、原発巣切除、化学療法、遠隔転移に対する局所治療の全てが行われた集学的治療群が10例(18.5%)で、化学療法単独群、BSC群と比べ、生存期間は有意に長かった(集学的治療群36.9か月、化学療法群12.3か月、BSC群5.9か月)。

本研究の結果から、検査理由に関わらず、EGDを施行する際には、十二指腸腫瘍の発見も念頭におき、十二指腸も注意深く観察する事が望ましいと考えられた。また、進行小腸癌の予後は不良であったが、遠隔転移に対する局所治療も含めた集学的治療が、進行小腸癌の予後を延長する可能性が示唆された。

### 論文審査結果の要旨

本研究は原発性小腸癌の臨床的特徴を検討したものである。2002年から2013年の間に岡山大学病院、関連施設の205例を対象に臨床的特徴、治療成績を検討した。

その結果、空腸回腸では進行期に診断されることが多いのに対して、十二指腸癌はスクリーニング目的の上部消化管内視鏡で発見されることが少なくなかった。予後不良因子として、PS不良、CEA高値、LDH高値、Alb低値、診断時症状、Stage III-IVが抽出された。Stage IV 54症例のうち原発巣切除、化学療法、遠隔転移への局所治療がなされた10例では生存期間が有意に長かった。結果として上部消化管内視鏡の際は十二指腸癌を念頭に置くこと、進行癌症例については集学的治療が有用であることが判明した。

実験の目的、手法、結果とその解釈とも適切になされており、小腸癌に関する重要な知見を得たものと評価される。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。